

「代替医療におけるケアの相互性」

伊東純一 1、鈴木勝己 2、伊藤康文 3、中上綾子 3、辻内琢也 2

早稲田大学人間科学部 1 早稲田大学人間科学学術院 2 早稲田大学大学院人間科学研究科 3

【目的】

報告者は治療者として平素から患者とのケアに関わっている。鍼灸や柔道整復などの代替医療の臨床では、患者と治療者の間に身体接触を中軸とした様々なコミュニケーションが包含される。昨今の代替医療においては科学的整合性への自明化が促される中で、患者と治療者の相互的な関わりによるケアの多様な意味に迫ることは難しい状況にある。報告者は、こうした問題を踏まえて、代替医療における「ケアの相互性」を医療人類学 (Medical anthropology) の学問的視座から紐解こうと考えた。

【方法】

本報告では医療人類学の研究手法 (ethnography) における質的な聴き取り調査および参与観察に基づいている。事例数は治療者、患者 (自閉性障がい)、患者の親族の 3 名である。調査期間は 2011 年 8 月から 2012 年 7 月までの約 1 年である。

【結果】

事例分析によって得られた語りのデータおよび参与観察の記録を分析することにより三者の関係性による「ケアの相互性」が示唆された。この「ケアの相互性」は広義の医療という営みに通底する要素を内包し、臨床現場においては EBM に代表されるような科学的整合性とは異なる観点や可能性を示唆している。また、本研究における医療人類学的アプローチによってコミュニケーションが困難な患者の世界に足を踏み入れ、治療者とのケアにおいて患者が内包する個の意味について迫ることができたと考えている。

【考察】

本報告によって示された「ケアの相互性」を考察することによって導かれたパラダイムは個に委ねられており、治療者に共有される方法論として扱うことは困難である。しかし、「ケアの相互性」と科学的整合性との接点を探ることが治療者の省察性へとつながり、患者を病いの淵から救うことの一助となることが示唆された